

◆次第：①開会、②議事、③その他

◆議事：①部会の進め方及び第6次総合計画の体系イメージについて、②まちづくりの視点について、③めざすまちの姿について

◆審議概要：

①部会の進め方及び第6次総合計画の体系イメージについて

○意見なし。

②まちづくりの視点について

- 提言書の「わたしの舞台は たからづか」に込められた想いを再度確認したい。
→人口減少が本格的に始まる中、行政頼りではなく、市民自らがまちをつくっていく時代に入っている。既存の団体のほか、やりたいことがある人や若い人が舞台上がれるようになればとの想いが込められている。
- 一言でいうと、自己実現できるようにしていくということ。自己実現できることが社会的な役割を持つことにもなる。一人一人のまちづくり活動をネットワークすることでうまく循環すると思う。
- 「女性のまち」というイメージを定着させていくのはどうか。女性に住みやすいまちを追求する。
- SDGsの17の分野のうち、日本はジェンダー問題が最も遅れている。宝塚が日本のジェンダー問題をリードするという考えは、SDGsの考えともフィットすると思う。
- 政府がソサエティ5.0を言っている。これからAIなどがどんどん進出してくる。今の小学生が大人になる頃には、今ある仕事は半分になっていくというのが文科省の考え。自分で仕事を生み出していないと生きていけなくなるかもしれない。日本、世界全体の動きを見据えて、大きな変化があっても、柔軟に対応できるような準備を行うといった記載をするべきではないか。
- 産業の再生、創成、新たな宝塚の付加価値をどう付けるかという経済学的な視点も必要ではないか。
→大企業に勤めに行くというスタイルではなく、ローカルに根ざした企業が、地域からどんどん出てきて、ローカルの資源をうまく使いながら、産業あるいは、にぎわいにつなげていくような、新しい産業が育成できれば、宝塚らしさが出てくるのではないか。

③めざすまちの姿について

【環境】

- 西谷は自然いっぱいというイメージがあるが、水田生態系が壊滅状態に近い。守っていく必要がある。
→全ての生きものとともに暮らせる環境の状態を維持する、あるいはつくっていくということ。
- 生物多様性、保全上、重要な里地里山として、西谷と中山台が環境省の里地里山500選に選ばれているが、市内でも認知されていない。まずは市民に知ってもらうことが西谷の里山保全のバネになる。
- 西谷や中山台のことなどを知り、関心をもってもらわないと、子どもたちもこの先、守っていこうと思わない。
- 良い景観や、環境教育にも素晴らしい場所があるのに生かされていない。緑の少年団をつくっていく

動きが、充実していけば良いと思う。

- プレイスメイキングという、公園や広場を使いながら、市民自らがまちを楽しんでいこうという試みが出てきている。活用されることで、保全にもつながっていく。そんな仕掛けを充実できないか。
- 近くに提供公園があるがキャッチボールもできない。公園の有効活用を地域で話し合っている。
- 西宮は、山歩きをする道の案内板が丁寧に設置されている。簡単にできることから、緑に親しむ気風をつくるのが大切ではないか。
- クリーンセンターのごみの焼却炉は、現敷地内で移築するとのことだが、広域連携で近隣市と一緒にやるということも一つの考えであったと思う。
→これからの時代、各自治体がそれぞれ個別でやるのは限界があり、非効率なので、広域的に手を組み、いろんなものをシェアしていくことが求められる。
- 有害鳥獣のアライグマが捕獲されている。カラスに餌をあげている人もいる。
→人間が自然の生態系に悪影響を与えるようなことをしてはいけないということではないか。
→自然とどう共生していくかという視点は大事。
- 茨木市の総合計画の「心がけから行動へ」というキャッチフレーズがある。市民も共に環境をつくっていく、守っていくというようなキャッチフレーズがあっても良いのではないか。

【観光・産業】

- 食品以外を購入する場所が少ない。高齢者になって車に乗れなくなると買い手が不便になる。
→小さな商店の人たちは、後継者がいないため続けられない人が多いことから、将来のためにも大型ショッピングセンターが1個くらいあれば良いのではないか。
- 観光で言えば、夜が楽しくないところには泊まらない。近所の人も含めて、みんなで行って、支え合って少しでも遅くまで運営できる、そんな仕組みが必要ではないかと思う。
→市内に仕事を生み出すことができれば、楽しい夜のまちの創出にもつながる。その魅力が伝わり、どんどん人も集まってくる。働いている人がベースをつくっているという部分もある。まちのベースによって、観光、娯楽、購買も変わってくると思う。
- 宝塚はチェーン店よりも個店の文化が育っている感じが、そっちを応援したい。
→大型店に依存しない宝塚らしい店舗が集まればもっと活性化するのではないか。
→大きな方向性として、大型店をめざすのか、あるいは、宝塚なりのきらりと光る店、個性ある店をネットワークして、宝塚らしいにぎわい、産業活性をめざすかの大きく2つある。
→いまや若者は、スマホで情報を得て、どんなところでも行く。いろんな魅力が宝塚に集まっていれば、大型店舗がなくても来ると思う。
- 閉店するお店もあるが新しいお店も入ってきている。
→新陳代謝が働いているうちはまだまだ正常だと思う。
- 情報発信の仕方として、面白い仕掛けやお店の情報をネットワーキングしていき、魅力を相乗効果でより高めていく戦略の方が、宝塚らしい観光産業ではないか。
- 中山台では、商店側と住民側と一緒に考え、商店街の活性化を考えている。

【文化・国際交流】

- 文化都市と言っているのに、大きなホールがなく中途半端なものが多いと感じる。
 - 市民が自分たちの活動を表現する場を作るのか、立派な人が来てくれる大きな場をつくるのか大きく二つの考え方がある。文化芸術センターは、前者で、みんなでもにつくり出し、まち全体に文化芸術があふれていくための拠点にしたいとの思いである。
 - 文化芸術センターは、著名な芸術家が大個展をやって、人がたくさんくるということを目指していない。普段から子どもたちもふらっと立ち寄り、大人も一緒に楽しみ、そこから輪が広がっていく、そんな拠点にしていきたいと考えている。宝塚の文化芸術は、歌劇だけではないと訴える大きな核になると思っている。芸術を市民が享受するのではなく、発展的に自らがつくり出していき、魅力ある宝塚をつくる。
- 市民全て、子ども、老若男女全てが表現者であって日々の暮らしがアート。それが社会、まちをつくって魅力ある宝塚をつくっていく。文化・芸術を自分たちで掘り起こし、新しいものをクリエイトしていくという視点が大事。
- 神社仏閣や手塚治虫記念館、温泉、歴史文化などもアートでつなぐことができる。神社仏閣などもアートで、人が作り出した文化なので、そういうものも、アート・文化芸術と広く捉えるべきである。
- 形のないものをみんなで作っていくという意味では、アートはいろんな立場の人が、同じ土俵で意見を言い合える媒体でもある。一人一人が発信者という要素を盛り込みたい。従来の既成概念にとらわれず、新しいものを売り出していき、一歩踏み出していき、そういうことがイメージできるような文言を盛り込んでほしい。
- 行政だけでなく、市民も含めて新たな情報発信媒体にアンテナを張り、みんながそれぞれで発信して、その力を利用できる仕組みをつくっていく。情報を共有してつなげるだけで、ものすごい力になる。
- 五月台中学校の吹奏楽部は毎年全国大会に行っている。凱旋して川西市のみつなかホールで発表会をしている。私はそれで良いと思っている。川西の市民に発信することができる。市内に小さなホールがあるなら、それを最大限に活用し、アートでつなぐ。子どもの急病にしても伊丹に行かなければならないことは駄目なことなのか。宝塚市で完結型のまちをつくる必要はなく、考え方を切り替え他市と連携を進めた方が良い。
- やはり歌劇を大切にしたいし、育てたいと思う。宝塚歌劇があることで様々な面でまちに波及していくため、歌劇と市役所で連携して行ってほしい。
- 宝塚市には文化財がたくさんあると聞いた。それらをあちこちで活用し、芸術回廊として結んでいくのはどうか。

【これからの都市経営】

- 人口減少していくといった前提では、住民がどう動くかが鍵になり、第6次総合計画では、いままで以上に協働が重要になる。
- 自治会の運営の仕方によって、住民が関わりにくくなっているところもある。20のまちづく

- り協議会のあり方を考える中で、もっとみんなが楽しく関われるようなやり方があるのではないかと。
- 自治会加入率は下がる一方であり、もしなくなれば、テーマごとのアソシエーションが支える以外にない。このあたり、しっかり総合計画に整理して、盛り込んでおく必要がある。
 - 地域の組織が、地域の施設の運営をするという流れをもっと確立すべきではないか。指定管理の際、普通の企業と同じようにするのではなく、一緒に地域を育て、施設を運営していくようなスタンスの契約の仕組みが必要ではないか。自治会やまちづくり協議会が収入を得て、やりたいことができるようになるなど、地域の組織の在り方を発展的に変えていく流れをつくる必要があるのではないかと。
 - 市に考えていただきたいことは、市が行っていることを外に投げるだけで、協働、新しい公共と錯覚してはいけないということ。一緒にパートナーとして、共に変わっていく新しい協働であるべき。
 - 施設の管理運営に関する契約書の文言を対等な表現に変えてもらわないと、行政と一緒にやっているという気にならないので、見直しをしてもらいたい。
 - 自分がやりたいところを担いながら、それがパッケージになるとすべてのまちづくり活動ができているというような地域活動が展開できれば良いと思う。